



#08

ベイビー・ドント・クライ

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

抜けるような爽やかな五月晴れの空。

学校からの帰り道、長谷耕平は川をまたぐ橋の下からみゃーみゃーと猫の鳴き声をするの気がついた。

土手の上の道から外れ、河原の傾斜をくだって橋の下に着くと、果たしてそこには、お決まりのみかんの段ボール箱が置いてあった。

側面には「大事に育ててあげてください」とマジックで走り書きがしてある。

（捨て猫か……可哀想なことするなあ……）

耕平は何気なくしゃがんで段ボールを覗き込んだ。

そこには三毛の子猫が5匹と……人間の赤ん坊が1人いた。

「えええええっ!」

耕平は思わず声を上げた。

（なにこれなにこれ？ 猫とセットで赤ちゃんも捨てましたってこと？ あり得ないでしょー!） 育児放棄とかそういうレベルじゃないでしょー!）

楽しげに遊ぶ赤ん坊を前に耕平はパニックに陥った。

そんな彼をよそに段ボールの中の赤ん坊はきゃつきゃつと声をあげながら楽しそうに子猫と

戯れている。

「え、えつと、とりあえずこれどうすればいいんだろ？ 救急車？ あ、でも別にけがとかしてるわけじゃないし、それは違うか？ じゃ、警察？ 警察でいいのかな？」

確信は持てなかったが、とりあえず耕平は携帯を取り出して110番しようとした。その時。

「このの、くされ外道があああああー!」

いきなり耕平の横つ面に強力な正拳突きが炸裂した。

「のわああああ!」

そのあまりの威力に耕平は河原をころころと転がり、川ぎりぎりのところで尻のようになまって停止した。

「こんなところに赤ん坊を捨てようなんて、それでもおまえは人間か!? しかも猫とセットだと!? てめえの血は何色だあああ!」

河原に這いつくばった耕平が顔を上げると、そこには握りしめた拳を震わせ、義憤に燃える美少女の姿があった。

ショートボブに整った目鼻立ち。強い意志を感じさせる瞳は濃い茶色味がかかっている。き

耕平の口はぼかを通り越してあんぐりと開けられる。
なに？ なんなの、この豹変ぶり？

これがさつき正拳突きで僕をぶっ飛ばした人と同じ人なの？

いつの間にか赤ん坊もミルクを吸いながらご機嫌そうにきゅきゅと笑っている。
美咲はいないないばーをしながらさらに赤ん坊を笑わせにかかっている。

あれ？ このなつきよう……？ もしかして……？

「あの……それ、もしかして氷川さんの赤ちゃん……？」

「ばっ、ばか、そんなわけないでしょ！」

美咲は顔を紅らめながら即座に否定する。

ぶんぶんと懸命に首を振る様子がなんだかちよつと可愛い。

「ただあたしはその……あ、ちよつと、待って！」

美咲はそつと哺乳瓶を河原に置いて赤ん坊を抱き直した。

どうやらミルクを飲み終わったらしい。

「はい、それじゃお姉ちゃんの肩にあごを乗せましょうね、そう、いい子でちゅね」

美咲は自分の肩に赤ん坊の頭を乗せ、背中をぼんぼんと叩き始めた。

やがて。

「げふう」

赤ん坊が大きなゲップをした。うわあ、おっさんみたい。

「氷川さん、そのミルク……炭酸入ってるの？」

「そんなわけないでしょ！ こうしてゲップを出してあげないと、ミルクと一緒に飲み込んだ空気があとでミルクと一緒に出てきて全部吐いちゃうの」

「へー、そうなんだ……」

耕平は感心して美咲を見つめる。

美咲は赤ん坊をあやしなげながら独り言のように呟く。

「あたしんち、大家族なの。それで小さいときから妹や弟の面倒を見てきて……。今日もこれから保育園に1歳の妹を迎えに行くところだったから、これもタイミング良く持ってたってわけ」

美咲は照れくさそうに笑って空になった哺乳瓶を振った。

「すごい」

「え？」

「すごい、えらいよ、氷川さん。僕、一人っ子だから具体的には判らないけど……そういう面倒を見られるのってやっぱりすごいと思う」

耕平は単純に心の底から思ったことを口に出す。

「そ、そうかな……自分でよく判らないけど……」

「そうだよ！ 氷川さんって見た目と違って本当に女の子らしいへぼあつ！」
耕平が余計な一言を発しなければ、美咲も二度目の正拳突きを繰り出す必要はなかったのだ
が……。

ミルクを飲んで満腹になったせいも、赤ん坊はすやすやと美咲の腕の中で眠っている。天使
の寝顔、というのはいかにも言うんだらうな、と耕平はしみじみ思った。

「ごめん、あたしそそっかしいから……さっきも誤解しちゃって」

「ううん、いいよ。……正直、僕もキョドってたし」

「……でも、この子、本当に捨てられちゃったのかな……」

「うん……」

美咲と耕平の間に沈黙が訪れる。

爽やかな五月の風が河原の草をそよそよと静かに揺らしている。

「許せないな、あたし。どんな命だって、せつかく生まれてきてくれたのに……生きようとし
ても、生きられない命だってあるのに……」

胸の中の赤ん坊を見つめながら、美咲は呟いた。その瞳はどきりとするほど真剣で、耕平
は自分が何を言ってもいけないような気持ちになった。美咲の胸中に、今、どんな想いが去来
しているのだろうか……。

などと考えていたらつい、美咲の豊かな胸に目がいってしまい、耕平は慌ててそこから視線
を逸らした。

「あーっ、いたいた！ よかったあー！」

河原の向こうから茶髪の若い男がこちらに駆け寄ってきた。

「お前が父親かーこらあーっ！！！」

問答無用で美咲はその男の顔面に飛び膝蹴りを打ち込む。

「おごう!?」

茶髪の男はそのまま河原に沈み、耕平は美咲が放り出した赤ん坊を慌ててキャッチした。

(命を大事にするんじゃないのか？)

耕平の内心のツツコミには気づく様子もなく、美咲は気絶した男の胸ぐらを掴んで立たせて
いた。

「こんなところに猫とセットで子供を捨てるなんて！ お前の血は何色だあああああー！」

さきほども聞いたような台詞で美咲が男を罵倒している。

思ったよりボキャブラリーは貧困っぽい。

「斉藤くん、ゆきちゃんいたのー?」

土手の上から黄色い呼び声がある。見るとツイントールでエプロン姿の女性が、子供をいっ
ぱい入れた小さな車輪付きの檻(?)を押してこちらにやって来る姿が見えた。

あれ？ これはもしかして保育園のお散歩タイムってやつ……？

「あ、沙織さん！ 見つけるには見つけたんですが、なにかこの娘が勘違いしてて」
痛む鼻を押さえながら茶髪男が女性に話しかける。

「あ、子猫！ そっか、あの子、猫好きだからねえ〜」

沙織は段ボール箱の捨て猫を見て得心がいったようだ。

ゆるゆるした笑顔にびったりのゆるゆるした口調だった。

反対にまったく得心がいかないのは耕平と美咲だ。

「あ、あの、これはいったいどういうことなんですか？」

おずおずと耕平が沙織に問いかける。

「あのねー、ゆきちゃんねー、脱走の常習犯なの。ご両親が体操の金メダリストのせいかしら？ とにかく運動神経が赤ちゃんばなれしてるのよ〜DNAってすごいわよね〜」

「脱走って？ その檻からですか？」

「そんなバカな話あるわけないでしょ！ いったいどうすればそこから赤ちゃんが出てこられるっていうのよ！」

納得いかない美咲は沙織に食ってかかる。

「でも、ほら」

ゆるゆるした笑顔のまま、沙織は橋を指さす。その先には段ボールから逃げ出した1匹の子

猫を追いかけるようにハイハイする赤ん坊——ゆきちゃん——の姿があった。

1匹と1人は橋の下に敷設された大きな水道管の上を仲良く楽しそうに移動している。

「あれ!? いつの間に!？」

先ほどまで抱いていたはずの赤ん坊がいらないことに気づき、耕平は声をあげる。

「ねえ〜、ゆきちゃんは本当に猫好きでしょう〜」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう!? 川に落ちたらどうするのよ!？」

ほんわかしてまるで危機感のない沙織をよそに、美咲は躊躇なく、勢い良く川に飛び込んだ。

「氷川さん!？」

「そんなことしなくても大丈夫よ〜ゆきちゃんは絶対落ちたりなんかしないから〜」

沙織の言葉は水中の美咲にはもちろん届かない。

そしてなんだか飛び込んだ美咲の様子がおかしい。

「ごほっ……あたし……泳げないんだ……った……」

「えー!？」

ばたばたと浮き沈みを繰り返しながら、ようやく聞き取れた美咲の台詞はかなりクリティカルなものだった。

「落ち着いて、氷川さん！ この川そんなに深くないから！ 川底に立てば普通にちゃんと顔出るから！」

しかし美咲の浮き沈みは止まらず、やがて浮き2…沈み8ぐらいの割合になってくる。パニックに陥ると人は足がつく深さの川でも容易に溺れてしまうのだ。

「あ〜ん、どうしよう、ゆきちゃんはともかくあの娘は大変そうだよ、斉藤く〜ん？」

「んなこと言われても俺も泳げないですし、正直川怖いですし！」

「ああっ！ もうっ！」

耕平は川にぎぶぎぶと入っていくと、美咲に駆け寄った。そしてそのまましっかりと美咲の腕を掴む。

「!?」

川の深さは1メートル40センチほどだ。

耕平の身長なら普通に立てば、確かに顔が出て息ができる。

しかしがっしりと耕平に抱きついてきた美咲の力はとても強く、耕平の体の自由を完全に奪ってしまっている。

溺れるものは藁をもつかむ。その藁がまさに今、耕平だったのだ。

やがて二人ともぎぶんと川に沈んだまま浮かんでこなくなった。

(ちよ、ちよと……氷川さん、放して……放して……ええい、もう！)

むにゆ。

むにゆむにゆむにゆ。

耕平の両手が美咲の形のよい乳房を揉みしだいた。

刹那。

「どこ触ってんだ、このくされ外道があー！」

本日三度目の正拳突きが耕平に炸裂し、

「あ、足が着く？」

美咲はそこが立てる程度の深さであることを、ようやく認識したのだった。

「はあつくしよっ！」

五月とはいえ、川の水はまだ冷たい。耕平と美咲の二人は、沙織が用意してくれた焚き火に当たって暖をとっていた。

ちなみにゆきちゃんは水道管をなんなく渡りきり、向こう岸に渡ったところを沙織たちにしっかりと確保されていた。まだ檻の中から子猫の方を見て遊びたそうな目をしてはいたけれど……。

「ごめんね」

「え？」

「あたしのせいで、その、そんなずぶぬれになっちゃって」

「いいよ。それより氷川さんが無事で良かった。……僕の方こそ、ごめんね。その……胸を……その……他に方法を思いつかなかったから……」

「え？ 胸？ あ、あの、その、あの……けほっこほっ、ごほっこほっ！」

「だ、大丈夫!?」

両手で胸を慌てて隠し、真っ赤になった美咲は激しく咳き込み始めた。

耕平が慌てて美咲の背中をぼんぼんと叩く。

その瞬間。

「げふう」

美咲の口から大きなゲップが出た。

濡れたときに川の水とともに空気もかなり飲み込んでしまっていたようだ。

二人の間に静寂が訪れる。

「ぶ」

耕平は堪えきれず、笑いを洩らす。

「ぶっ……くくく、あははは、ひ、氷川さん、今の、あ、赤ちゃんみたい、あははは」

「赤ちゃ……」

真っ赤になったまま、美咲は絶句する。

「ぶっ」

だがやがて美咲も楽しそうに笑いだした。

「ふふふ、そうね、今の、確かに赤ちゃんみたいね。うふふふふ、あはははは」

二人の笑いは五月晴れの空に心地よく溶け込んでいくのだった。

そんな二人を見て、ゆきちゃんと子猫は不思議そうに首を傾げていた。